

無神論者に手を差し伸べた 同志社大神学部

「同志社のキリスト教主義は人生にどう役立つか」というテーマですが、やはりこの大学には、役に立つ本物の教育があります。大体、神様の話をしょっちゅうする人間、例えばドストエフスキーみたいな人は神様を信じていません。神様を本当に信じている人は、あまりそういったことや自分の信仰について、大きな声でがんと言わないのです。

私は東京で生まれ、高校まで埼玉で育ちました。高校時代の同級生は私が外交官として調子がいいと、みんな同窓会とかで集まってくる。捕まるとみんな逃げちゃって、また作家になると、無二の親友みたくして戻ってくる。ところが同志社の神学部出身の人たちは、私が調子のいい時は知らんぷりで、困ったことがあると、すぐに救いの手を差し伸べてくる。同志社大学神学部には、こういう伝統があります。

私が同志社大学神学部を志望した理由は、神様はいないということを勉強した

者でかつユング心理学の専門家、樋口和彦先生でした。

先生はその話を覚えていなかったけれども、メールをくださった。「佐藤君、いいことを覚えていてくれてよかった。人間の認識は非対称、記憶も非対称。教師が言った重要なことを学生は覚えていなくて、どうでもいいようなことを覚えているし、しかも記憶は変容してくる。でも、教育はそれでいいんだ」と書いてくださいました。

そこで教わったのは「関係性を構築していく」こと。これが同志社教育の特徴です。さっき言ったように、本当に困っているときに手を差し伸べる。自分にリスクがあることをやる。そういう人が同志社の仲間にも多い。人間の抱く嫌

レクチャー

同志社京田辺会堂献堂記念講演

「同志社のキリスト教主義は人生にどう役立つか」

作家、元外務省主任分析官 佐藤 優氏



かったから。いろいろ複雑な経緯はあるんですけど、当時2年先輩のガールフレンドがいました。彼女は日本基督教団の旧長老派教会の熱心な信者なので、私がマルクス主義の話などをすると、彼女から「そんな変な思想に関心を持つな」と説教された。そして向こうが大学に入ったたら私は振られてしまった。東京にいて顔を合わせるのも嫌だし、彼女の信じているキリスト教というものを潰さなきゃいけないと思ったのも神学部を受けた理由の一つです。

入試の面接ではいろいろ聞かれました。「神学になぜ関心を持ちましたか」「高校3年の時にラインホルド・ニーバーの『光の子と闇の子』を英書購読で読みました」「ほう、難しかったでしょう。それであなたは何を勉強したいんですか」「無神論を勉強したい」「ニーチェを?」「いえ、フョイエルバッハとかマルクス」。すると「うちにそういう本、たくさんありますから」と言われた。面接が済んで部屋を出ようとしたら、その先生が「もし他の大学に受かってもしひうちに来てください。面白いですよ」。これが神学

妬心や競争心を越えたところの、人間的な信頼関係。それは教育の中で培われるわけです。

ロシア時代に触れた アカデミズム

私自身の専門は組織神学、わかりやすく言うと、キリスト教の理論です。学生時代は特にチェコスロバキアにおける教会と国家の関係を研究しました。それからチェコで勉強したかった。ところが当時、チェコは共産国でかなり厳しい体制の国だから、専門が神学だと留学できない。スイス留学も勧められたけど、私は社会主義国に住みたかったんですね。キリスト教を認めない国の中で、なぜ彼

／彼女らはクリスチャンでいるのかを、皮膚感覚で知っていたわけでした。

すると、文学部と神学部の先生をしていたクラス・シュベネマン先生が、東ドイツへの留学の道を作ってやるって言うてくださった。現在のライプツィヒ大学です。これはブラハのカレル大学から分かれた、すごく伝統のある大学です。東ドイツ時代はカール・マルクス大学という名でした。ドイツの大学は、神学部がないと総合大学と言えません。そのカール・マルクス大学プロテスタント神学部なんていう、シュールな学部に行かないかという話になった。しかし、どうも気持ちがいまらなかった。

神学とは虚学です。三一（三位一体）とは何なんだ、イエス・キリストは人なのか神様なのか。いずれも結論は出ていない。神学では、理論的な整合性の高い言説はたいいてい、異端として排除されます。それに論争過程に必ず政治が入ってきて暴力的な解決になることが多い。そして、同じことが何度も蒸し返され、繰り返して出てくる。普通、学問は積み重ねになっていくけれど、神学は違う。だから

略歴 佐藤 優（さとう・まさる）氏

1960年東京都生まれ。1985年同志社大学大学院神学研究科修了後、外務省入省。主任分析官として対ロシア外交の最前線で活躍。2009年外務省を退職。2005年『国家の罭 外務省のラスプーチンと呼ばれて』で第59回毎日出版文化賞特別賞を受賞。2006年『自壊する帝国』で第5回新潮ドキュメント賞、第38回大宅壮一ノンフィクション賞受賞。『獄中記』『交渉術』『同志社大学神学部』『世界史の極意』など著作多数。

ら、いわゆる進歩とはあまり関係ない感じがします。私がライフワークで選んでいるのは受肉論といって、神様はどうして人間になったかという話です。これも1900年頃くらい研究されていて、まだ結論は出ていない。だから、私が一生研究しても結論は出ないでしょう。

そういう努力って、時には必要なんです。だから神学から見ると、哲学や文学なんかも現実の世界に足をかけた実学です。実学と虚学と両方のバランスが取れて初めて、それは全体性を持った知になる。だから社会主義国のカール・マルクス大学にも神学部があった、私は、東ドイツではなく、どうしてもチェコに行きたかった。

それがある日、就職部の掲示板を見ていたら、外務省専門職員採用試験案内にチェコ語の専門家を養成するということが書いてあった。外交官試験の勉強には、神学の勉強がすごく役立ちました。例えば、コメンタリーという注釈集を使っているが聖書を読むやり方は、国際法や憲法の勉強の仕方と同じなんです。

私が外務省に入ったのは、ロシア連邦

がソビエト社会主義共和国連邦だった時代です。英国陸軍語学学校で学んだ後、モスクワ国立大学に留学して、哲学部科学的無神論学科で勉強していました。科学的無神論という名のもとで宗教研究をやっていた。ソ連崩壊後は1992年から95年まで、モスクワ国立大学哲学部宗教史宗教哲学科で教鞭を執っていました。1910年代の終わりから30年代までの、スイスとドイツの弁証法神学について、苦勞しながらロシア語で講義しました。

それでアカデミズムに縁ができました。でも、そこにはずいぶん発想がある。日本大使館二等書記官という名刺では、外交官として会えるのは外務省の課長くらいが限界です。ところが肩書きが「モスクワ国立大学客員講師」だと、大統領顧問や大統領補佐官などにも平気で会える。だからアカデミズムの肩書きは外交官の仕事に便利だと思っていたんです。同時に、ロシア科学アカデミー民族学人類学研究所の大学院に入れてもらって、ロシア政府の民族政策理論の形成などをしていた。今のロシアだったらできないけれども、それくらい西側の知であるとか、いろいろ

ろなユニークなものを入れておこうというあのソ連崩壊前後の状況の中で、ロシアの国家機関にはありました。私はアカデミズムに触れた。知識は本当に生きていることをロシアで感じました。

同志社のキリスト教主義

我が校祖新島襄は、なぜ同志社大学をつくろうとしたのか。ここだけの話だけど新島襄は劣等生だった。アマースト大学を卒業すると普通はB・Aという学位が取れます。Bachelor of Arts and Science。ところが新島襄はB・Sだった。Bachelor of Science。ギリシャ語、ラテン語ができなくて、単位が与えられない。内村鑑三もそうです。でも二十いくつになって、今までと全然違う価値体系、学習体系のところへ来てすべてをマスターできるはずがない。新島襄はそれが分かっているから、近代的な大学を日本につくらないといけないと思った。土台を作り、アメリカやヨーロッパに出ていっても五分に争えるような人材を育てるといふ一念が同志社大学になったんです。慶



応大学も早稲田大学も東京大学も、あれは総合大学じゃなくてポリテクニーク（専門学校）です。なぜか。神学部がないから。キリスト教主義がないからです。ここで重要なのはミッションスクールとキリスト教主義学校の違いです。ミッ

シヨンスクールはキリスト教を通じて日本を植民地にするための学校です。だから教育の内容は全部詰め込み。それに対してキリスト教主義大学は、別にキリスト教徒を増やすことが目的じゃない。逆説です。そういう間接法でいったほうが、本物のキリスト教徒が増えることがよく分かっているから。否定的でも肯定的でもないから、キリスト教にコミットメント（関与）する。キリスト教に触れながら物事を見て、考えていく人をつくっていくことが、私は同志社のキリスト教主義だと思うわけです。

ここでもう一回、さっき言ったフォイエルバッハについて考えてみましょう。フォイエルバッハは、神学の秘密は人間学だと言ったでしょう。その通りなんです。キリスト教の真理はどこで現れるかというと、イエスと人間の関係で現れたように、イエスと神の関係がイエスと人間の関係で現れる、その関係の類比なんです。だから、神学は人間学になる。キリスト教主義に触れている人と触れない人とは、同じ事柄が違って見えることがあるし、行動が異なることがある、同

じ出来事がより深く見えることがある。例えば最近、キリスト教主義を体現したと思う人。私は後藤健二さんだと思います。ISIL、イスラム国によって彼は殺された。彼の生き方は、実はキリスト教主義とすごく関係しています。彼はジャーナリストになってから洗礼を受けた。どうしてか。きつとどこかで死ぬだろう、そのとき自分ひとりじゃ寂しいからと言ったら、牧師に叱られた。そんな動機じゃだめだ、生きることを考えないといけない。彼は、信仰を受け入れてから不思議なことがたくさん起きたと書いています。チェチェンなどの危険地帯に行って命を失いかけるような時に、神様の話をするることによって、救われるんだと。確かにそれはある。ムスリムだって、文化的な面が違ってもキリスト教と同じ一神教的なバックグラウンドがある。聖書の例えが分かるから相互理解が深まります。

キリスト教ですごく重要なのは、「召命」という感覚です。神様から名前が具体的に呼ばれるんですね。湯川遥菜さんはちよつと変わった人だったでしょう。

彼がイスラム国で行方不明になった時、誰も彼のことを構わなかった。マスコミも。おそらくその時、後藤さんには神様の声が聞こえたんです。今までの経験からして、おまえなら助けてやれるんじゃないかと。みんなが構わないでいるけど、おまえはそれでいいのかと。99匹の羊を残したって、穴の中に迷い込んでしまった1匹の羊を助けに行くことがおまえの仕事じゃないかと。

私は湯川さんを見ても、そういう神の声は聞こえない。ただ私は、後藤さんにそれが聞こえたのは分かる。そういうことが分かれると、彼があのような行動をとった理由が分かるよね。すると、その意味においては、死ぬ最期の瞬間においても彼は怖くなかったと思う。この辺の感覚や普遍性が追体験できるかどうかということも、キリスト教主義にどれくらい触れているかで分かります。

ただ後藤さんが登場したことによって、軍隊とかをたくさん動かすというような発想を持つよりも、危険を顧みず同胞たちを助けに行く日本人がいるという現実が世界に伝わった。そしてその人は難民

の問題や子どもたちの問題を一生懸命考え、行動していたことも世界に伝わった。このことで後藤さんは、すごく国益に貢献したと私は思う。必ずしも同志社の枠ということだけではなく、キリスト教の持つ普遍性を知っておくのはすごく重要な出来事だと思います。

同志社のキリスト教主義の特徴は、ヨーロッパ風になるとアメリカ風になることを目指しているわけではない。でも非キリスト教徒の人でも、一回はキリスト教のお葬式に行つてほしい。そうしたらクリスチャンじゃない人でも、ああ、やはり葬式はキリスト教式にしたいなと思うでしょう。人生をどう考えるか、あるいは死んだ後、我々はどうなるのかということについて、きちんと葬儀の中でメッセージが出る宗教がキリスト教です。キリスト教の力が日本で弱いのは、土着化していないからです。キリスト教の重要な課題は土着化させること。同志社は、常にキリスト教を日本の中にどうやったら土着化させていけるのかと孤軍奮闘している、そういう日本のキリスト教の一つのセンターです。これが同志社の

そこから伸びていく、発展させていく。こういう色々なヒントを与えることが、私はキリスト教主義的な教育だと思っています。

「同志社の知」を明らかに

今、京都大学や早稲田大学などが英語で一部の講義をやっていますね。この前、東大を退官になった先生と会った。古代ローマ史を英語で講義するのは、日本語の講義と比べてどれくらい伝わっているかと言ったら、3割程度だと。ということは、ローマ史の講義を英語でやる意味があるのだろうか。同志社も明治期の最初、講義はほとんど英語だった。でもそれは、欧米の概念などについて日本語の翻訳ができていなかったから。せっかく母国語で講義できる体制を作ったのに、今なぜそれを壊すようなことをする必要があるのでしょいか。英語の講義も重要だけど、それは英語ネイティブの人と、横に補助をするチューターがいて、その中で特にオリジナルなことができた場合

キリスト教主義教育でも現れていると思います。さっき言ったように、関係を構築する。教育というのは、教え、教えられる者の関係ができることで信頼関係ができていくということだと思います。それから、教師たちを使い倒すこと。信頼関係の中で、本の正しい読み方をいい先生が教えてくれる。それから友だちを大切にすることです。ただ、同志社には欠点もある。例えば就活対策に関して、あまりずるくやっていないですよ。就活を上手にやるためには、採用側にいた人間をうまく巻き込まないといけない。

いずれにせよ、大学というところは何が重要か。技術を身につける必要もあるけれど、それと同時に、エビステマー、ギリシャ語で言うところの「変わるものない知」を身につけないといけない。中世の格言で「総合知に対立する博識」という言葉があります。オタク的に細かい知識がいくらあっても、神様を知るために、それが一つにまとまっていないような知識は意味がないですよ、と中世の人たちは考えた。総合知があれば、自分が今どういう状況にあるのかを客観的に

のこと。今は留学も簡単にできる時代です。

文科省が今、小学生に英語を教えようとしているけれど、あれで日本人の英語力はもつと下がると思う。どうしてか。

1952年時点で高校卒業段階での必修英単語は6800語。今は3000語です。ゆとり教育の最盛期は2200語。

標準的な中学校の単語数は900語。そのうちの約300語を小学校に下げて勉強するという。すると、小学校だったら英語はみんな簡単だと思っている。中学校でもそう思っている。その分のツケが全部、高校以降に来る。その結果どうなるか。高校で全員、英語から落ちこぼれることになりました。小学校の間の勉強は日本語に特化すればいい。特に日本語の論理的な文章を読むこと。私がもし英語を教えるとしたら、中学校段階で英検準1級まで、語彙数としては6000くらいまでやる、詰め込ませる。そうすれば一生使える英語の力になります。英語には2通りあります。我々が必要とする英語はどっちの英語なのか。1つは、例えばスターバックスへ行く。キャ

今は日本の大学全体が自信を失っています。同志社の場合は失ってはいませんが。世の中が新自由主義的な、すべて点数化できるような形で大学を評価する。国際度がいくらとか、国際学力比較は何とか、そういったあほくさいものにエネルギーをかけている。これは本当によくないと思う。

教育とは、関係を構築することです。一つひとつの現場、一つひとつのゼミ、一つひとつの講義。例えば、今日この1時間の講演で伝達できる知識は少ししかない。しかしそこで、ああこれを読んでみたい、こういうふう勉強してみようというヒントがいくつかあるでしょう。

ラメルマキアート、ワン、エキストラホット。の中には動詞も前置詞も接続詞も何もない。植民地で奴隷にされているような人間が単純労働をするために最低限必要な、コミュニケーション用の英語。こういう英語教育って、やる必要ないと思う。われわれの生活は、日本語で循環しているわけだから。となると、やはり文科省のやっていることは、どこかまずいものがあるんじゃないか。そのときに大学あるいは自分のゼミで独自に判断する、あるいは学生たちが、これで本当に大丈夫ですかと言って、自分のいるところにおいて改善していく努力というのは、これはものすごい重要だと思うんですね。同志社はそういうことができるかと思う。

私は現在神学の仕事も少しやっているし、外交官としても、あの鈴木宗男事件に巻き込まなければまた別の人生だったと思うし、中東との関係もかなり深い4人分か5人分の人生をやったかもしれない。本も相当数出しているかもしれない。それが可能になったのは、やはりこの同志社の6年間の教育があったからで

す。私は同志社の先生たちにとっても感謝していると同時に、55歳になったことを考えると、そろそろ私自身の経験や拙い知の蓄積をどう次世代に継承していけばいいかという課題もあります。

そこで今年から神学部のお手伝いを始めて、月に1回ずつ新島三部作を読んでいます。原点の新島襄に、もう1回立ち返ってみようじゃないかと。きちんと読み解くことによって、あの時代、新島先生が考えていたことを追体験するのと同時に、同志社式学習法といったものを打ち立てられないかなという野望を持っています。これは文字にしないと意味がないので、新潮社で本にします。同志社大学東京オフィスでは、世界が直面している諸問題について民族問題という切り口から連続講座を行っています。これは文藝春秋から本になる。このようにして、東大的、京大的なものとも、早稲田や慶応とも、また上智とも異なる、同志社的な知というものを形に現したいと思っています。

(2015年5月15日・同志社京田辺会堂 言館礼拝堂)